『魂と舞踊』にみる ヴァレリーの舞踊論(2)
ーヴァレリーの踊り子論を中心にー

佐藤典子

Ⅰ 研究目的及び方法

19世紀末から20世紀初頭にかけて西欧芸術に現われた新しい創造に向かう芸術運動，アール・ヌーヴォーは，舞踊の領域にまで及んで新しい展開を迎えさせ，ニュー・ダンスを登場させた。本研究では，この世紀転換期の芸術家の舞踊論を，対話篇『魂と舞踊（L'Ame et la Danse）』（1921）において，舞踊は「変身の行為そのもの」であるとしたポール・ヴァレリー（Paul Valery 1871～1945）に焦点を絞り考察する。

研究方法として，①『魂と舞踊』の原典に当たり，先行研究をふまえた上で解釈する。②その中に描かれている架空の踊り子アチクテを通し，ヴァレリーの踊り子論を考察する。③さらに踊り子の恍惚，変身に着目し，その意味を明らかにする。

ヴァレリーはフランスの詩人，思想家である。マラルメに師事して象徴派の伝統を継ぎ，純粋詩の理論を確立する一方，徹底した分析的精神によって芸術，自意識の問題などについて論じた。

Ⅱ 結果および考察

(1) 踊り子論　アチクテ

舞踊団のソリスト，アチクテは「素晴らしい，究極の踊り子」として登場している。舞台に現われた時の彼女は「何ということもない」，「小さな鳥」，「肉体をもたぬもの」という印象である。しかし踊り始めるにつれて，その「きれいな筋肉質の肉体」が注目され，また「小さく若い松かさのようにつぼんだ頭」，「白い腕」，「小さな胸」をしており，「ほっそりした華奢なあの娘の中にどうして自然があのような力と素早さの魔物を閉じ込めることができたのか，不思議に堪えない」と観る者を感嘆させる。踊り子は，力と集中された動きによって数々の花の上にとまる「蜜蜂」にもたとえられ，「軽やかな強さ」は踊り子にとって「至高善」であると語られる。ここにはロマンティック・バレエにおけるような踊り子の美しい外見の印象と，その華奢な肉体から正確な動き，「緻密な移動」を生みだしている力と素早さをそなえたアチクテの強さが強調されているといえる。

アチクテの踊りは，純粋な，それ自身のほかに目的を持たない行為である。それは「普遍的典型」となりうる完璧さ，調和のとれた美しさをそなえた彼女の歩行において明確に表れている。そしてアチクテは跳躍，精気に満ちたパの連続へと移り，「大地」terreと「時間」dureeとを織り合わせてゆく。このdureeという言葉は一定の対象，表象内容が時間的に維持されることを意味する。つまり，舞台の上にいる彼女は日常とは切り離された純粋な行為によって，現実にはありえないイメージの世界を創造しているということがわかる。

舞踊はクライマックスに向かい，アチクテは「至福の純粋直接的な激しさ」に包まれる。そして彼女は「刹那」であり，「最も高貴な破壊」である「炎」の形をとって現実性，日常性を焼き尽くし，代わって一人の女の中にある「神聖なもの」を輝かせ始める。「不安定の中で」神々しくきらめきながら踊る。まさにアチクテは舞踊という行為において，神の属性である永遠性や全能性の刹那の輝きを放っているといえるのではないか。

やがて彼女は力尽きて倒れ，舞踊は終わる。そしてアチクテは現実世界に帰る。

(2) 恍惚と変身

アチクテの舞踊のクライマックスでは，「揺れ動く」，「ふるえる」という言葉が繰り返し現われてくる。そして「すべての陶酔のうち，最も高貴なものは行為による陶酔」であり，「特に肉体を揺り動かす行為は，われわれをある異様な驚くべき状態へと入らせる」ということが語られる。ヴァレリーはこの「行為による陶酔」を強調するために，その対極として「生の倦怠」という観念を与え，長い説明を加えている。

アチクテの陶酔は，「無である現実への否定に酔った肉体の解放」である。緊張と最大限の敏捷さの中で，彼女は恍惚状態ravissement へと入ってゆく。この時，彼女の肉体は変化や自由さ，普遍性を魂と同じほどに求めるのである。「行為の数を重ねて自己の同一性を変えようとする」肉体は，ヴァレリーのいう，アチクテは「変身の行為そのもの」に結び付く。変身とはここでは明らかに肉体の変身となり，むしろ肉体というより，それはアチクテの「もう《動き》とはいっていられない…。もはや振りと手足の区別がつかない」という，動きと肉体の渾然一体となった現象，「無数の形によって食われている」状態を指していると考えられるのである。「偉大な舞踊」ともいうべき肉体の解放，陶酔は，もはや「何かを表現する」という意味を持ってはいない。

「変身」metamorphoseという言葉について，今後研究を継続する中で，その表す意味を追及していきたいと考えている。

—「」内は①"OEuvres de Paul Valery", Tombe Ⅱ, Pleiade, Gallimard, 1957 からの引用 。—参考文献②『ヴァレリー全集3』　筑摩書房　1973　③『哲学事典』　下中邦彦編　平凡社　1973　④『仏和大辞典』　伊吹武彦他編　白水社　1981